本書の主要目次

章	地政学の例題を解く
第1章	地政学の素養を身に付けよ
第2章	我が領土問題への思いと行動
第3章	先人たちの地政学的視点
第4章	誰が日本を守るのか
第5章	中国との摩擦は解消できるのか
第6章	領土問題の基本は歴史認識から
終 章	日本人としての自覚

だれが日本の領土を守るのか？ ――今、日本の国土が危ない

濱口 和久著

たちばな出版
1,470円（税込み）

「領土を守る」意志と備えを忘れるな

評者 川上高司
拓殖大学海外事情研究所教授

石原慎太郎東京都知事の東京都による尖閣諸島購入宣言は改めてわれわれ日本人に領土意識を覚醒させ野田総理も尖閣諸島購入の意志を明確化した。日本は今、尖閣諸島をめぐり中国との係争が開始寸前の状況にあると言っても過言ではない。このような時に領土問題を真っ向からとらえた本が出た。

領土問題は国境の画定という国家の基本的国益に触れる。また、政治経済のみならず軍事的側面も併せ持つ古くて新しい問題である。とりわけ経済的側面として石油や天然ガス、鉱物資源、漁業資源などが含まれており国益に直結するため難しい問題をはらんでいる。

また、インド・パキスタン間でのカシミール問題のように歴史的宗教的側面が強い場合もあり単に国益だけでは解決できないものもある。領土をめぐる問題はしばしば軍事衝突という武力行使を伴う場合も少なくない。特に、南シナ海における中国の強硬な軍事的攻勢は領有権を主張するフィリピン（スカボロー礁）やベトナム（南沙諸島）と一触即発の様相も呈している。

著者は、領土紛争の代表的な例に、イギリスとアルゼンチンが衝突した一九八二年のフォークランド紛争を引き合いにだす。ここでは地政学的に重要なフォークランドを守る強い意志を持ち、OPLAN（戦争計画）を持ち準備を周到に行っていたイギリスが勝利した。日本が北方領土、竹島、尖閣諸島らの領土問題に立ち向かう時、「領土を守る」意志を持ち毅然とした態度で臨むことが重要だと著者は喚起する。そしてそこでは、軍事的な備えをしている国家が勝利を得る。

しかしながら領土問題はその解決法により国家間紛争にエスカレーションする可能性がある。過去には領土問題が条約や双方の話し合いといった武力以外の方法で解決された事例もある。二〇〇四年十月にロシアと中国は、長年の紛争地であったアムール河・ウスリー河に浮かぶ島に関してその帰属を解決した。また、司法により解決する場合もある。二〇〇八年にはシンガポールとマレーシア間で係争地の帰属が国際司法裁判所によって決定している。南極大陸は一九五九年の南極条約で領有権をすべて凍結することによって領土問題が起きないようにした。このように領土問題にはさまざまな解決方法がある。

領土問題は日本国にとり避けて通れない喫緊の最重要課題である。どのように解決するのが最善の策なのか。英知を結集し外交手段を駆使して解決にあたらねばならない。その意味で本書が提起した「領土を守る」という最も重要な意志と準備が国家には必要不可欠であろう。

ミニミニフラッシュ

「地球のからくり」に挑む

大河内 直彦 著

新潮新書
777円（税込み）

経済の世界でのお金と同じく、物質の世界ではエネルギーが共通言語であり、人類はひどいエネルギー中毒にかかっているという。海洋研究開発機構の気鋭の研究者が、炭素の循環、赤潮と石油、地球の定員、身体の三分の二はハーバーボッシュ法による窒素、それは原発一五〇基分の電力で支えられている、などなど、古今東西に及ぶ壮大な謎解きとともに、地球の営みとわれわれの暮らしとの結びつきをエネルギーを軸に考えさせてくれる画期的な著である。

きのこの話

新井 文彦 著

ちくまプリマー新書
1,029円（税込み）

著者は写真家にして大のきのこ好き。きのこに関するあれこれが語られ、美しい写真とともに愉しめる本である。日頃、食べものとしてしか接していないきのこのこと、たまには、その種類や生態のことも気にしていいのではないか。カメラを携えて、主に北海道の阿寒湖周辺の森を歩くとのこと。いかにも楽しそうで、いつしか「きのこ目」をわがものにしたとある。すなわち、きのこの存在を敏感に感じ取る目を持つにいたったと。その夢中さに、羨望さえ覚える。自然と人のかかわりなども語られている。